グローバル企業としての自己

令和６年５月４日
黒田インターナショナルコンサルティング
黒田　毅

これらは資本力と政治力、技術力における世界との対等な企業構築である。これらは先端企業システムや生産システムとともに、グローバル基準における世界滋養における企業構築を可能とできるものである。

これらは世界との対等性であり、企業の内実がそれを可能とするものである。

これらは過去の企業努力が、結果を与えることなのである。これは、過去は決して無駄でないことの完全な証明である。

これらグローバル企業としての自己は、世界戦略を得、世界における生産コントロールなど、新たな企業の可能性への参加を行うものである。

全ての努力が結果へつながるならば、未来という可能性への参加は過去における企業努力の結果なのである。

ただ企業運営基準が国内基準からグローバル基準へ転換することへの必要性は存在するものである。

これらは下請けでなく、世界との対等な企業構築がそれを与えるのである。それらは必ず最も優れた企業基準と環境における企業構築と経営なのである。

最も優れた人材がしのぎを削るのが経済の現実なのである。これらは競争における現実の向上を与えるものである。

グローバル基準はそうして存在するのである。これらへの順守は、世界市場への参加を与えるものなのである。

より優れた企業環境は企業の改善とともに、競争という現実において、自己優位性の構築を模索するものである。これらはソフト資産という企業の基準がより優れた現実への到達を可能とするのである。これらは優れた人材が企業を牽引する必要性なのである。